

「美味しさ」を表す言語的表現と共起する非言語的表現

—テレビ番組に見られる表現に着目して—

成 利楽・龔 芳舟・岩井実里・永田良太

Linguistic Expressions on "Tastiness" and Co-occurring Nonverbal Behaviors : Focusing on Expressions seen on a TV program

Li-le CHENG, Fang-zhou GONG, Misato IWAI, Ryota NAGATA

キーワード：美味しさ，言語的表現，非言語的表現，共起関係

1. 研究の目的

「美味しさ」を表す表現に関しては、これまで言語的表現を中心として研究が行われ、「美味しさ」を表す表現のバリエーションには性別や年齢が関わること

(早川, 2009), 日本語とイタリア語を比較すると、日本語では、素材の持つ甘味に対する「ほのか」、「ほんのり」、「自然な」のような表現が多用されることが明らかにされている(松尾, 2014)。しかしながら、高木(2006)が指摘するように、我々は日常の対面会話において、音声言語だけでなく、表情や姿勢、身体などの非言語的表現も合わせて使用している。会話場面において、そのような非言語的表現は不可欠なものであり、用いられた言語的表現が適切だとしても、非言語的表現と適合していなければ、聞き手を不快にさせたり、信頼を損なったりしてしまう恐れもある(高木, 2006)。

そこで、本研究では、日本語において「美味しさ」を表す言語的表現はどのような非言語的表現と共起するかについて、テレビ番組における会話場面を分析することで明らかにする。

2. 分析資料と調査方法

2.1 分析資料

本研究では、テレビ番組「マツコの知らない世界」(TBS 放送)の2016年1月~5月放送分のうち、食べ物(料理, 食品)を扱った10回分を分析資料とする。この番組はメインの出演者が食べ物を味わった後にその感想を述べるというものであるが、その食べ物の美味しさを視聴者に伝えるのが目的の一つであるため、「美味しさ」を表す言語的表現およびそれと共起する非言語的表現がより顕著に見られると思われる。それに加えて、番組内では、料理だけでなく、果物やスノー

ツやお菓子など幅広い食べ物が扱われているため、様々な「美味しさ」を表す言語的表現が見られると考えられる。

2.2 調査方法

上記の分析資料を3名の分析者で分析し、メインの出演者による「美味しさ」を表す言語的表現を抽出した。その際、「非常に」や「とても」のように、他の表現と用いられ、程度を表す表現は除外したが、「最高」や「素晴らしい」のように、それ自体で「美味しさ」を表す表現として使われたと考えられる表現は分析対象に含めた。抽出した「美味しさ」を表す言語的表現は松尾(2014)の分類に従って分類した。松尾(2014)は、食べ物自体の属性だけでなく、喫食者の精神的な状況や食体験などの要素から「美味しさ」を表す言語的表現をまとめ、分類したものである。以下に、松尾(2014)による分類を示す。

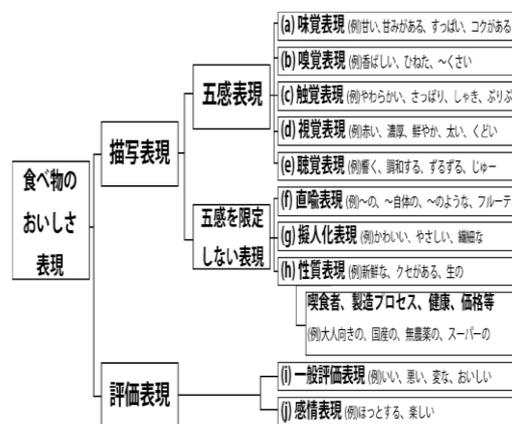


図1 松尾(2014)による「美味しさ」を表す言語的表現の分類

また、上記の言語的表現と共起する非言語的表現を分析するに際して、本研究では Patterson (1983) の分類を参考にする。Patterson (1983) では、会話における人間の身体動作や表情だけでなく、話の中断や沈黙などのパラ言語も非言語的表現と見なされており、分類も多く、記述も詳しい。なお、本研究では、「美味しさ」を表す言語的表現と共起する非言語的表現を分析対象とするため、Patterson (1983) で挙げられている「話の継続時間」については分類から除外した。本研究における非言語的表現の分類を以下に示す。

【本研究における非言語的表現の分類】

1. 対人距離 2. 視線 3. 身体接触 4. 身体の向き
5. 身体の傾き 6. 顔の表出性 7. 話の中断 8. 姿勢の開放性 9. ジェスチャー 10. 頭によるうなずき
11. 声の抑揚、話す割合、声量などの近言語（パラランゲージ）

上記の分類のうち、「7. 話の中断」とは無言や長時間の沈黙を指す。また、「8. 姿勢の開放性」には拒否的な姿勢と開放的な姿勢とがある。例えば、手に関して、胸の前で両手がしっかり組まれている場合は拒否的な姿勢であり、片方の手が腿の上に、もう片方の手が首の後ろに置かれている場合は開放的な姿勢であると考えられる。

3. 結果と考察

3.1 「美味しさ」を表す言語的表現

本研究の分析資料に見られた「美味しさ」を表す言語的表現のうち、上で見た松尾 (2014) の分類に当てはまるものをカテゴリ別に集計したものが表 1 である。なお、抽出した表現の分類に際しては、3名の分析者で妥当性の確認を行った。

表 1 から分かるように、今回の分析資料中には合計 394 (延べ数) の「美味しさ」を表す言語的表現が見られたが、そのうち「i. 一般評価表現」が最も多く見られた。「一般評価表現」には、「美味しい」や「いい」等の表現があるが、これらの表現はどの食材や料理に対しても「美味しさ」を表す表現として使用することができるため、最も多く見られたものと考えられる。

ここで、その内訳を見てみると、177 の一般評価表現のうち、「美味しい」という表現が全体の約半数を占めていることが分かる (図 2)。ここから、「美味しさ」

を表す様々な日本語の一般評価表現の中でも、実際に使用されやすい表現には偏りがあることが示唆される。

表 1 「美味しさ」を表す言語的表現の出現数と割合

カテゴリー	出現数	割合 (%)
a. 味覚表現	32	8.1%
b. 嗅覚表現	11	2.8%
c. 触覚表現	22	5.6%
d. 視覚表現	20	5.1%
e. 聴覚表現	1	0.3%
f. 直喩表現	30	7.6%
g. 擬人化表現	5	1.3%
h. 性質表現	36	9.1%
i. 一般評価表現	177	44.9%
j. 感情表現	60	15.2%
合計	394	100%

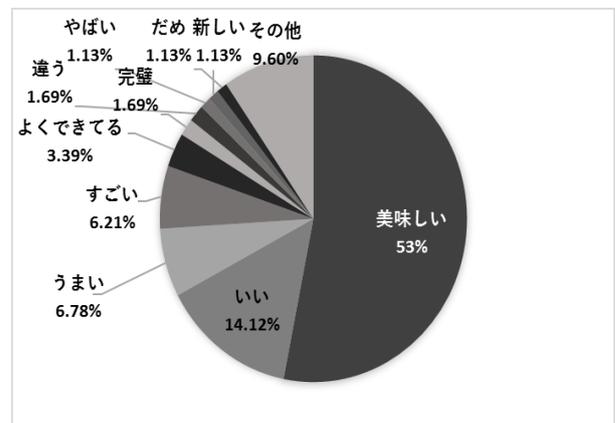


図 2 「一般評価表現」の内訳 (割合)

また、一般評価表現が用いられる際には、話し手の感情を強調する「美味しい、美味しい」、「すごい、すごい」のような反復表現や「すごい、これ」、「美味しい、すっごく」のような倒置表現も見られた。

なお、一般評価表現以外の表現としては、それぞれ以下のような例が見られた。

a. 味覚表現

例 (1) 甘みも酸味も強く来る。

例 (2) バタークリームとかもほんとに淡〜い味。

b. 嗅覚表現

例 (3) いい香りだわ。

例 (4) これね！本当にいい香りがする。

c. 触覚表現

例 (5) スポンジもなくなっちゃうんだよね。口の中で。

例 (6) さくさくする。

d. 視覚表現

例 (7) あっ 綺麗な～ 黄金色。

例 (8) ダントツで黄色いのよ。

f. 直喩表現

例 (9) それこそスモークベーコンちょっと混ぜたみたいな鼻の抜けなのよ。

例 (10) ちょっとポトフに近い感じになる。黒胡椒を入れると。

g. 擬人化表現

例 (11) すっごい繊細。

例 (12) 奥の方で爽やかな感じ？

h. 性質表現

例 (13) これはもう王道ね。

例 (14) 別にこれを車内で食べてもそんなに匂いも感じないし。

また、今回の分析資料には、松尾（2014）の分類以外にも「美味しさ」を表す言語的表現として「k. 欲求表現」，「l. 感嘆表現」，「m. 経験談」が見られた。それぞれの例を以下に示す。

k. 欲求表現（16回）

例 (15) 家で食べたい。【食欲】

例 (16) これだったら、今度買おう。【購買意欲】

l. 感嘆表現（25回）

例 (17) おほーほーほー

例 (18) わあー

m. 経験談（8回）

例 (19) 名前はすごく有名なんだけど、食べたことがない。

例 (20) 買ったことないな。

これまでの先行研究で指摘された「美味しさ」を表す言語的表現は食べ物自体の属性について言及されるものが多かったが、上記の「欲求表現」や「経験談」では評価者自身が主体となり、当該の食べ物に対する評価者の欲求や経験が表されている。このように、食べ

物に直接言及しないような「美味しさ」を表す言語的表現も本分析資料においては見られた。

3.2 「美味しさ」を表す言語的表現と共起する非言語的表現

次に、「美味しさ」を表す言語的表現と共起する非言語的表現について分析する。「美味しさ」を表す言語的表現と共起した非言語的表現のうち、3名の分析者に共通する判断として抽出されたものを Patterson（1983）の分類にもとづいて集計したものが表2である。

表2 「美味しさ」を表す言語的表現と共起した非言語的表現

非言語的表現	出現数	割合 (%)
1. 対人距離	5	1.3%
2. 視線	152	40.9%
3. 身体接触	3	0.8%
4. 身体の向き	11	3%
5. 身体の傾き	8	2.2%
6. 顔の表出性	51	13.7%
7. 話の中断	20	5.4%
8. 姿勢の開放性	2	0.5%
9. ジェスチャー	26	7%
10. うなずき	36	9.7%
11. 声の抑揚, 声量	17	4.6%
12. 食べ物への接触	28	7.5%
13. 食べる動作	13	3.5%
合計	372	100.1%

表2から分かるように、「美味しさ」を表す言語的表現と共起する非言語的表現としては「2. 視線」が最も多く、次いで「6. 顔の表出性」，「10. うなずき」が見られた。以下に例を示す。なお、以下の例（21）と例（22）では、（ ）内が文脈、「」が言語表現、[]が言語表現と共起した非言語的表現をそれぞれ表す。

例 (21)

（ケーキをほとんど食べてしまった後で、値段を聞き、あまりの高さに「もっと大事に食べればよかつ

た」と後悔する。その後、ケーキの味を回想するよう
に)

「あーうまいわ」 [視線上→下]

例 (22)

(サンドイッチを一口かじる。)

「うん！うまい！」 [大きくうなづく]

これらの例においては「うまい」という「美味しさ」を表す言語表現と共起しつつ、その食べ物を注視したり、うなづくいたりすることで、味に対する驚き、納得、満足などが非言語的に表されていると考えられる。なお、その他の非言語的表現として、「顔の表出性」では、食べた時に美味しさに驚いて「目を見開く」、「目を細める」、「笑う」等が見られた。

これまでは、本分析資料に見られた「美味しさ」を表す非言語的表現のうち、Patterson (1983) の分類に当てはまるものについて見てきたが、それ以外にも「箸やスプーンで食べ物を指す」、「鼻で食べ物の匂いを嗅ぐ」といった「食べ物への接触」が28回、「一口で食べる」、「再び食べ始める」等の「食べる動作」が13回見られた。Patterson (1983) では、コミュニケーション全般における非言語的表現がカテゴリー化されているが、「美味しさ」を表す場合には、このような異なる非言語的表現が見られる。

これらの「食べ物への接触」や「食べる動作」は相手に向けて行われた動作ではなく、すべて自らの「美味しい」という感覚を、食べ物を通して表す動作である。これまでの非言語的表現に関する先行研究では、このような「モノ」との関わりが捉えられていないが、対象である「食べ物」に対してどのように振る舞うかということも、「美味しさ」を表す非言語的表現を考える上では必要な観点であると言えよう。

3.3 「美味しさ」を表す言語的表現と非言語的表現の共起関係

これまで、「美味しさ」を表す言語的表現およびそれと共起する非言語的表現についてそれぞれまとめてきたが、両者の間にはどのような共起関係があるのだろうか。まず、「美味しさ」を表す言語的表現が用いられた場合に、非言語的表現と共起する共起率（共起した非言語的表現／言語的表現×100）を求めたものが表3である。なお、一つの言語的表現に対して複数の非言

語的表現が生じた場合がある。

表3 「美味しさ」を表す言語的表現と非言語的表現の共起率

カテゴリー	共起率
味覚表現	65.6%
嗅覚表現	109%
触覚表現	77.3%
視覚表現	80%
聴覚表現	0%
直喩表現	46.7%
擬人化表現	60%
性質表現	97.2%
一般化表現	80.8%
感情表現	96.7%
欲求表現	56.3%
感嘆表現	140%
経験談	112.5%

表3を見ると、非言語的表現と共起しやすい言語的表現があることが分かる。特に、感嘆表現によって「美味しさ」が表される場合には、非言語的表現が共起することが多い。では、そこではどのような非言語的表現と共起しているのであろうか。両者の共起関係を表したものが表4である。なお、非言語的表現との共起が見られなかった聴覚表現に関しては表4中から除いてある。

非言語的表現との共起率が高かった「感嘆表現」について見ると、「視線」、「顔の表出性」、「うなづく」、「声の抑揚・声量」と共起しやすいことが分かる。例えば、「顔の表出性」と共起する場合には、以下のような例が見られる。

例 (23) わあー [目を見開く、口を大きく開ける]

例 (24) おほーほーほーほー [笑みをうかべる]

また、表4を見ると、共起する非言語的表現に偏りがあるものがあることが分かる。「a. 味覚表現」、「d. 聴覚表現」、「h. 性質表現」は「視線」、「b. 嗅覚表現」は「食べ物への接触」や「視線」、「j. 感情表現」

は「視線」や「顔の表出性」とそれぞれ共起しやすい。

一方、「i. 一般評価表現」を見ると、「視線」や「顔の表出性」に加えて「ジェスチャー」、「うなずき」、「食べ物への接触」など、様々な非言語的表現と共起していることが分かる。先に述べたように、「一般評価表現」としては「美味しい」や「いい」といった表現が用いられることが多い。これらの表現は例えば「味覚」や「嗅覚」といった他の言語的表現に比べてどのような「美味しさ」であるかという具体性に乏しいため、様々な非言語的表現によって「美味しさ」についての情報が補われていると考えられる。以下に例を示す。

例 (25) あ！これいいかも [匂いを嗅ぐ]

例 (25) においては「いい」という一般評価表現が用いられているが、何が「いい」のかについて、[匂いを嗅ぐ]という非言語的表現によって補われていると言える。

4. まとめと今後の課題

本研究では、「美味しさ」を表す言語的表現と非言語的表現との共起関係について分析を行った。「美味しさ」を表す言語的表現に関しては先行研究においても明らかにされてきたが、「美味しさ」を表す場合には

表4 「美味しさ」を表す言語的表現と非言語的表現の共起関係

	対人距離	視線	身体接触	身体の向き	身体の傾き	顔の表出性	話の中断	姿勢の開放性	ジェスチャー	うなずき	声の抑揚 音量	食(物)への接触	食べる動作	合計
a. 味覚表現	1 (4.8%)	15 (71.4%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (9.5%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (9.5%)	0 (0%)	1 (4.8%)	0 (0%)	21 (100%)
b. 嗅覚表現	0 (0%)	4 (33.3%)	0 (0%)	1 (8.3%)	0 (0%)	1 (8.3%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (8.3%)	0 (0%)	5 (41.7%)	0 (0%)	12 (99.9%)
c. 触覚表現	0 (0%)	4 (23.5%)	0 (0%)	1 (5.9%)	1 (5.9%)	1 (5.9%)	1 (5.9%)	0 (0%)	4 (23.5%)	0 (0%)	2 (11.8%)	1 (5.9%)	2 (11.8%)	17 (100.1%)
d. 視覚表現	1 (6.3%)	9 (56.3%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (12.5%)	1 (6.3%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (6.3%)	1 (6.3%)	0 (0%)	1 (6.3%)	16 (100.3%)
f. 直喩表現	0 (0%)	6 (42.9%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (21.4%)	1 (7.1%)	0 (0%)	1 (7.1%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (14.3%)	1 (7.1%)	14 (99.9%)
g. 擬人化表現	0 (0%)	1 (33.3%)	0 (0%)	1 (33.3%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (33.3%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (99.9%)
h. 性質表現	0 (0%)	19 (54.3%)	0 (0%)	1 (2.9%)	0 (0%)	4 (11.4%)	2 (5.7%)	0 (0%)	1 (2.9%)	4 (11.4%)	0 (0%)	2 (5.7%)	2 (5.7%)	35 (100%)
i. 一般評価表現	0 (0%)	56 (39.2%)	0 (0%)	3 (2.1%)	1 (0.7%)	23 (16.1%)	8 (5.6%)	0 (0%)	13 (9.1%)	15 (10.5%)	8 (5.6%)	11 (7.7%)	5 (3.5%)	143 (100.1%)
j. 感情表現	3 (5.2%)	24 (41.4%)	3 (5.2%)	4 (6.9%)	4 (6.9%)	8 (13.8%)	1 (1.7%)	2 (3.4%)	5 (8.6%)	2 (3.4%)	1 (1.7%)	1 (1.7%)	0 (0%)	58 (99.9%)
k. 欲求表現	0 (0%)	4 (44.4%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (11.1%)	1 (11.1%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (33.3%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	9 (99.9%)
l. 感嘆表現	0 (0%)	7 (20%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (5.7%)	8 (22.9%)	2 (5.7%)	0 (0%)	2 (5.7%)	6 (17.1%)	5 (14.3%)	3 (8.6%)	0 (0%)	35 (100%)
m. 経験談	0 (0%)	3 (33.3%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (11.1%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (11.1%)	0 (0%)	2 (22.2%)	2 (22.2%)	9 (99.9%)

その中でも「一般評価表現」が最も用いられることが明らかになった。また、言語的表現によって「美味しさ」が表される場合には「視線」という非言語的表現が最も多く共起することが分かった。

「美味しさ」を表す言語的表現と非言語的表現との共起に関して、「感嘆表現」のように、非言語的表現と共起しやすい言語的表現があることが明らかになった。また、「味覚表現」や「嗅覚表現」のように、特定の非言語的表現と共起するものもあれば「一般評価表現」のように、様々な非言語的表現と共起するものもある。そのように「一般評価表現」が様々な非言語的表現と共起するのは、「味覚」や「嗅覚」といった他の「美味しさ」を表す言語的表現に比べて、どのような「美味しさ」であるかという具体性に乏しいため、様々な非言語的表現によって「美味しさ」についての情報が補われているものと考えられる。

本研究では「美味しさ」を表す言語的表現について分析・考察を行ったが、会話の中で「美味しさ」が表される場合には、表現レベルだけでなく、談話レベルでも分析する必要があると思われる。「美味しさ」を表す表現は会話の中で用いられ、そのような表現が用いられた後も会話は続いていく。「美味しさ」を表すことが会話の展開にどのように関わるかについても今後、明らかにすべき問題であると考えられる。

また、分析対象についても、今後はさらに広げる必要がある。本研究では、特定のテレビ番組におけるメインの出演者の使用に着目したが、今後さらに対象を広げることで、今回の結果が個人的な特徴であるのか一般性を持つのかについて明らかにすることが出来るであろう。いずれも今後の課題としたい。

注

1) 本研究においては、言語的表現と同時に見られたものに加えて、「美味しい」という発話の直後に生じた「笑い」など、「美味しさ」を表す言語的表現の直前・直後に見られたものも研究対象に含める。

参考文献

- 岡野絹江 (2001) 「非言語コミュニケーションに関する一考察—認識とスキルの向上—」『富山福祉短期大学紀要福祉研究論集』 2, 3-13.
- 高木幸子 (2006) 「コミュニケーションにおける表情および身体動作の役割」『早稲田大学大学院文学

研究科紀要(第一分冊)』 51, 25-36.

早川文代 (2009) 「現代日本人の食感表現」『日本家政学会誌』 60(1), 69-72.

松尾章子 (2014) 『食べ物のおいしさを表すことばに関する研究』京都府立大学博士論文

Patterson, M. L. (1983) *Nonverbal Behavior: A Functional Perspective*, Springer New York